

## 靖國神社ご創建

### 百五十周年を迎えて



元空将 織田邦男

父が百二歳で亡くなって、早や三年が経つ。誠実、朴訥、

几帳面、不言実行、約束は必ず守るといふ典型的な大正生まれの人だった。その父も生前、子供たちに先の大戦について語ることは少なかった。

父がかつて広島県呉市にあった海軍工廠に勤め、戦艦大和の建造に従事していたのを

筆者が知ったのは、十五年前のことだった。父が九十歳の誕生日を迎えた日、筆者に

「もうそろそろ、ええじゃろう」と言って語り始め、戦艦大和の「第二砲塔」建造担当だったことを初めて息子に打ち明けた。最後に「このことは家族にも口外してはならないと大日本帝国海軍に命ぜら

れていたもので、これまで話さなかつたが、九十歳になりいつ死ぬか分からないから、もうええじゃろう」とぼつりと呟いた。

筆者は大変驚き、感動した。戦後に生まれた筆者に對しても、「家族にも口外しない」という（既に消滅した）大日本帝国海軍との約束を直に守る大正生まれの人の律義さである。

その父には弟がいた。筆者にとつては叔父である。彼は海軍に志願し、一式陸攻のパイロットになり、昭和十八年十一月二十日、ギルバート諸島上空で散華した。享年二十歳。この日はマキン、タワラの上陸作戦の前日であり、ギ

ルバート諸島上空で激烈な日米航空戦があったのだ。

昭和十八年だから、未だ敗戦の色は濃くなかつたと思ふ。叔父は日本の勝利を固く信じていたに違いない。もちろん独身であり、遊興にふけることもなく、厳しい訓練を経てパイロットになり、祖国を護るといふ純粹な至情でもって、文字通り命を懸けて戦った。

叔父は今、靖國神社に祀られてゐる。

父は上京の際には必ず靖國神社にお参りした。年をとって身体が不自由になつても、行きたがつた。父を最後に靖國神社に連れて行つたのは、五、六年前だつたらうか。参

拜後、遊就館で弟の遺影をしみみと見つめていた。

これで満足したのか、東京駅では新幹線の窓から満面の笑みを浮かべて手を振っていた姿を思い出す。父は、戦陣に散つた弟のことは決して忘れてはならないと、常々筆者に語っていた。

#### 御霊に敬意を払うことが 国際常識

その靖國神社が六月で百五十周年を迎えた。

靖國神社の前身である東京招魂社は、大村益次郎の発案の下、明治天皇の命により、戊辰戦争の戦死者を祀るために明治二年（一八六九年）に創建された。明治十二年（一

八七九年）に靖國神社と改称され、これまで国のために亡くなつた約二百四十六万余の英霊が祀られている。

ご創建五十周年には大正天皇が御親拝された。百周年には昭和天皇、香淳皇后両陛下が御親拝され、その二カ月後には上皇・上皇后両陛下が、そしてその二日後には、まだ学習院初等科に御在学中の今上陛下が浩宮徳仁親王殿下として御親拝された。

平成十八年、小泉純一郎首相が、現職総理としては中曽根康弘氏以来二十一年ぶりに八月十五日の靖國参拝を行ったが、それ以降、首相の靖國参拝は途絶えて久しい。天皇陛下も、昭和天皇が昭和五十



150周年を迎えた靖國神社

年十一月二十一日に御親拝されたのが最後である。

国のために命を捧げた先人をお祀りする神社に、天皇陛下も御親拝できず、一国の首相も参拝しないのは異常なことである。だが、日本人がその異常さに気が付かなくなってしまった。

二百四十六万余の英霊は、誰一人として「天寿を全うすることなく、国に殉じたのである。現世に生きる我々はこのことをもっと深く受け止めなければならぬ。

国に殉じた先人に、国民が感謝し、御霊安かれと祈り、その崇高な意志の継承を誓うのは世界の常識である。

米国ではアーリントン国立

じられたが、この時には中国は全く問題にしていない。  
A級戦犯の合祀が報道された二日後、キリスト教徒の大平正芳首相が春季例大祭に参拝している。翌五月、時事通信の取材に応じた中国の最高責任者である鄧小平氏は、靖

墓地に、韓国では国立ソウル顕忠院に、フランスでは凱旋門の無名戦士の墓に、国民が参拝し、そしてその代表たる大統領が参拝して慰霊、顕彰する。外国の要人來訪時も、先ず参拝、献花し、御霊に敬意を払うのが国際常識となっている。

### 奇妙な反対論

昭和六十年頃までは、首相が毎年、靖國神社に参拝していた。

戦後に限定すると、二十八人の首相のうち、十四人の首相が六十六年間で計六十七回参拝している。昭和二十六年十月の秋季例大祭には、吉田茂首相以下、閣僚、衆参両院

國参拝にもA級戦犯にも言及していない。

また大平首相はこの年の十二月、中国を訪問したが、熱烈に歓迎されているし、靖國は話題にも上らなかった。翌年の昭和五十五年（一九八〇年）の終戦記念日には、鈴木善幸首相と共に閣僚が大挙して参拝したが、この時も全く問題になっていない。

実は、靖國参拝を政治問題化したのは日本のメディアなのである。国内のメディアや左翼勢力は、靖國参拝を政教分離や歴史認識などから問題視していた。そして、メディアは卑劣にも、中国にこの問題を持ち掛けた。

「御注進」された中国は、

議長が揃って戦後初めて公式参拝し、サンフランシスコ講和条約調印によって日本が再び独立できた旨を英霊に報告している。

いつから現在ののような異常状態になったのか。事の発端は昭和六十年、中国が突然、靖國参拝を許さないと言い始めたことである。

中国は、極東国際軍事裁判でのA級戦犯が合祀されていることを理由に、首相の公式参拝を激しく非難し反発を繰り返すようになった。だが、奇妙なことにA級戦犯十四人が「昭和殉難者」として靖國神社に合祀されたのは昭和五十三年十月十七日である。翌年、春の例大祭前にそれが報

靖國問題を提起することによって日本が動揺する様を見て、「靖國」が非常に有効な外交カードであることに気が付いたのである。

昭和六十年八月十四日、中曾根内閣はメディアの反発に応える形で政府統一見解を出した。正式な神式ではなく、省略した拝礼によるものならば、公式参拝は政教分離には反しないとの見解である。

翌日、閣僚を引き連れ、玉串料を公費から支出する首相公式参拝に踏み切った。メディアはこれを大々的に批判した。有効な外交カードを得た中国、韓国は、靖國参拝を非難し、これに呼応する形でメディアが騒いだ。

一連の騒動を受け、中曽根首相はこれを最後に首相在任中の参拝を止めてしまった。「公式参拝が日本による戦争の惨禍を蒙った近隣諸国民の日本に対する不信を招くため」と述べているが、皮肉にも「靖國」という外交カードの切れ味の鋭さを証明してしまった。中国、韓国は日本に叩頭させる手段として、使い勝手のいい外交カードを手にしたわけだ。

### 本質は？

外国の識者には靖國問題の本質を鋭く見抜いていた人もいる。中国専門家であるペンシルベニア大学名誉教授のアーサー・ウォルドロン氏は述

べる。

「中国共産党にとって真の狙いは、日本の指導者に靖國参拝を止めさせることよりも、日本の指導層全体を叱責し、調教することである。自国の要求を日本に受け入れさせることが長期の戦略目標なのだ」

「靖國は大きな将棋の中の駒の一つにすぎず、日本がそこで譲歩すれば、後に別の対日要求が出てくる。最終目標は中国が日本に対し覇権的な地歩を固めることなのだ」

南カリフォルニア大学のダニエル・リンチ准教授も次のように述べている。

「中国は近代の新アジア朝貢システムでの日本の象徴的

な土下座を求めている。アジアでの覇権を争いうるライバル日本を永遠に不道徳な国としてレッテルを貼っておこうとしている」

当時、中国は経済力、軍事力共に日本に及ばなかった。しかしながら近い将来、日本に対し優位に立ち、日本を管理できる支配権を確立することを国家目標としていた。その目標達成に資する便利な外交カードを得たわけだ。まさに、中曽根首相の参拝自粛は中国の思う壺だった。

そもそも、家族や祖国を護るため命を懸けた祖父たちに感謝の誠を捧げ、追悼するのは現生に生きる我々国民の義務である。戦争賛美でもなけ

れば、侵略戦争の肯定でもなんでもない。先人に対する純粹な感謝の発露であり、人間が万物の霊長たる所以といっても過言ではない。

国のことを思い、国のために亡くなった先人に感謝し、慰霊、追悼、顕彰することのない国家が、今後とも生存し、繁栄を続けていくことは難しい。国家が生存するためには誰かが身を粉にして働かねばならない。

### 「公」の精神が衰退

そういう崇高な精神が美德にもならず、感謝されることもなければ、将来、国家のために尽くそうという国民はいなくなる。自己中心で、自分

自身を最優先にして他を顧みない国民ばかりになれば、日本という国家が厳しい国際社会の中で平和と安全を確保しつつ繁栄を続けることはできなくなる。

天寿を全うすることなく、国家に命を捧げた先人に対し感謝の念を忘れるようでは、徐々に精神は荒廃し、モラルは低下し、国家意識のメルトダウンが起きる。いやもう起きていくのかもしれない。

現在、壮年世代の五十万人に上る人が引きこもりになっているという。自分のことのみ考える若者はなかなか結婚せず、少子高齢化が進む。子育てより自分の快楽が優先するようでは、子育てのストレ

スを克服することは難しい。最近、親による幼児虐待が目立つが、これも決して無縁ではないと筆者は思う。閉塞状態にある現在の日本は「公」への精神の衰退が一番の原因なのだ。

日本が閉塞状態から脱するためには、先人たちのように身を捨てて国のために尽くす、公に尽くすことは善なること、この価値観を取り戻さねばならない。そのためには先ずは「靖國」の復活である。外国の非難に動揺することなく、「国のために命を亡くした英霊をお参りするの当たり前」前のこと。外国が口を差し挟むべきことではない」という毅然とした態度を取り



戻すことだ。

昭和二十年、日本を占領したGHQ(連合国軍総司令部)は、靖國神社を焼き払いドッグレース場を建設しようとした。この時、ローマ教皇庁代表であり上智大学学長でもあったブルーノ・ビッター神父は、GHQ総司令官のマッカーサーに対し次のように語った。

「いかなる国家も、国家のために死んだ戦士に対して、敬意を払う権利と義務がある。それは戦勝国か、敗戦国かを問わず、平等の真理でなければならぬ」「我々は、信仰の自由が完全に認められ、いかなる宗教を信仰する者であろうと、国家のために

死んだものは、すべて靖國神社にその霊が祀られるよう、進言するものである」

マッカーサーはビッター神父の真意を理解し、彼の進言により靖國神社は焼き払いを免れた。彼の言はまさに原点であり、これに立ち返らねばならない。

靖國参拝を再開すれば、しばらくは中国、韓国、場合によっては同盟国である米国からも反発があるかもしれない。だが靖國参拝は、日本人の心の問題であり、内政不干渉たるべしと臨むことだ。国民の大多数が毅然としていれば、外交カードの効力は無に帰する。外交カードは効力がなくなれば、消滅する。

叔父も出撃の際、戦友と「靖國で会おう」と誓い合っただけである。従容と戦場に赴いたのも、国民が靖國で供養、追悼してくれると信じたからである。その靖國神社に帰ってきている先人たちを我々が供養、慰霊しなければ、それは罪深い約束違反なのである。

繰り返すが、天寿を全うすることもなく、ただただ祖国のために散った先人を追悼し感謝の誠を捧げることは、国家の責務であり、我々日本国民の大切な義務なのである。それを忘れた国家に将来は無い。靖國神社ご創建百五十周年を迎えて、強く胸に去来(きよらい)したことである。